2006 年 5 月 27 日

ワタリウム美術館講演会「南方熊楠の森を知る」シリーズに参加して

第 1 回　南方熊楠　生態調査からマンダラ的世界観へ

2006 年 5 月 27 日（土）ワタリウム美術館で開催された講演会「南方熊楠の森を知る」シリーズを聴講した。今回はプレ講演会を含めると 2 回目となる。

南方熊楠は慶応 3 年（1967 年明治元年の前年）和歌山市に生まれた。東京大学では同級生に、夏目漱石、正岡子規などがいた。彼らは今日のわれわれと異なり、西洋文化と混合される前の純粋な東アジア文化を直接体験するとともに明治以降の西洋文化を肌で吸収できた貴重な体験をした人たちである。また、1900 年には南方熊楠の英国から日本へ帰る船と夏目漱石が日本から英国へ向かう船が洋上で交差したと言う。熊楠は和歌山市―東京―アメリカーキューバーロンドンー那智―田辺で生活し、生態学（ecology）に生涯を捧げた。多くの研究成果は英国の”Nature”に掲載され、全部で 51 報になると言う。恐らくこれだけ多くの論文が掲載された人は世界でも他にいないのではないかと思われる。”Nature”は、それに 1 報でも掲載されれば研究者として 1 人前と言われるほどの価値ある雑誌である。生態学をベースとした信念から 1909 年ごろ神社合祀反対運動を行った。土宣法龍（博物学者、高野山の管長）に宛てて生命、マンダラについて書簡で論じている（2004 年新発見資料）。熊楠の生物研究は菌類、藻類、粘菌、高等植物、昆虫、小動物など広範囲にわたり、これらの研究を通じて心と物との相互関係を南方曼荼羅として表した。熊楠のこのような生き方に人類のこれからのあるべき生き方を学ぶことができた。2006.5.14.田辺市に南方熊楠顕彰館がオープンし多くの資料が展示されている。

講演にあたっての**松居竜五先生の言葉**：

南方熊楠（1867-1941）は、アメリカ、英国での学問研鑽の後、帰国して紀伊半島で隠花植物を中心とする生物の調査をおこなった人物です。生態系（エコロジー）という考え方を初めて本格的に日本に導入した熊楠の調査は、紀伊半島の原生林における多様な生命の連関をさぐるものでした。さらに、熊楠はそうした生命の世界を、仏教的な枠組みを用いて、マンダラとして書き記そうと試みています。近代科学のさらに先を見据えた熊楠の思想の持つ意味についてお話ししたいと思います。

講師＝松居竜五

1964 年生。東京大学大学院比較文学専攻課程修士修了。ケンブリッジ大学客員研究員などを経て、現在龍谷大学国際文化学部助教授。著書に『南方熊楠、一切智の夢』（朝日選書）、『南方熊楠の森』（共著、方丈堂出版）、『南方熊楠英文論考』（共訳、集英社）など。

2006.5.14.オープンした南方熊楠顕彰館
http://www.minakata.org/cnts/shuuzouhin/